

昭和四十年二月一日 第三種郵便物認可
平成四年三月一日発行 毎月一回 二日発行
俳句雑誌 沖 第26巻第2号

沖

俳句雑誌「おき」

2
月号

沖
発行所

朴冬芽

能村 研三

全集の編纂

昨年の暮、「馬酔木」編集長の橋本榮治さんから二冊の全集が送られてきた。梱包を解いてみると「海坂」六十周年記念の刊行ということで、『百合山羽公全集』と『相生垣瓜人全集』であった。二人ともかつて「馬酔木」の重鎮で、浜松で「海坂」という俳誌を創刊した。先師登四郎の大先輩で、登四郎俳句にも大きな影響を与えた人たちである。

登四郎が、

瓜人先生羽化このかたの大霞
と詠んでいることから先師との
関係が深かったことがわかる。

百合山羽公は『寒雁』など五冊の
句集があり、昭和四十九年に蛇笏賞
を受賞している。全集には三三一九
句が収められている。

連写せる千鳥飛翔のひかりかな
桃冷す水しろがねにうごきけり
二月はや天に影してねこやなぎ
落花生みのり少なく土ふるふ

羽子板市月日渦巻きはじめたり

相生垣瓜人は『明治草』など三冊
の句集があり昭和六十一年に蛇笏賞
を受賞している。全集には三一八四
句が収められている。

人日の樂器屋にゐて試し弾き

里神 楽くらがり酒を賜れり

冬帝の威の足らざるを不服とす

全うな寒さが欲しき鼓かな

吉凶を占ふ朴の冬芽かな

保護色の冬服でゐる公吏かな

使はれぬ手擦れ辞書あり四温晴

草々の呼びかはしつづ枯れてゆく
先人は必死に春を惜しみけり
春寒に入れり迷路に又入れり
覚めきらぬ者の声なり初蛙
死にきらぬうちより蟻に運ばるる

二冊共、解題、年譜、季語別俳句
索引が付されている。

相生垣瓜人は昭和六十年に八十七
歳で、百合山羽公は平成三年に
八十七歳でこの世を去っているが共
に没後二十一年を越えた。「馬酔木」
作家の頭影を橋本榮治さんが熱心に
手がけたことはうれしい限りであ
る。

本年は登四郎七回忌にあたるの
で、『能村登四郎全集』の刊行の準
備が始まったところだが、十四句集
の句数でも五千を越えると思われ、
その編集作業も気を引き締めてやら
なければならぬと思っている。



能村 研三

寒雷

林 翔

干支

「俳句」（角川書店発行）一月号に「新年詠8句」を依頼されていたので「丁亥新春」と題して出した。勿論「テイガイシンシユン」と音読するのだが、五句目に、

誰が愁ひ捨てし凹みか草紅葉
丁亥を何と訓みます初クイズ
の句を入れた。年配の人なら誰でも答えられるクイズだが、若い人には無理かも知れない。

私の年代の人は、小学生の頃から十干十二支を教え込まれていた。

十干は、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸であり、十二支は、

一考 後山 茶花 啄む 鶴一羽

子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥

地を肥やす落葉ならむを舗装路に
である。十二支の訓読は誰でも出来ると思うが、厄介なのは十干の訓読である。十干は木火土金水キョウスイの五行にそれぞれ兄弟エトを配して、甲キョウノ乙ニのえ、乙ニのえ、丙ヘイのえ、丁テイのえ、乙ニのえ、丙ヘイのえ、己キのえ、庚ケイのえ、辛シンのえ、壬ニのえ、癸スイのえ、癸スイのえ、辛シンのえ、壬ニのえ、癸スイのえ、癸スイのえ——と訓むので

此の世は冬至唐茄子いまレタス

昇降機に英語満ち充つくクリスマス

寒雷や楸邨の影浮き揺らぎ

日めくりを引っぱがす音うそ寒し

風邪と言ひ辞せし宴や独り酒

教へ子に先に逝かれて年も逝く

教へ子の小説ずしり読初す

ある。

従って丁亥の訓読は「ひのとぬ」である。

十干十二支をひっくるめて「え」というが、古文書には必ず干支えとが出てくる。

私が小学生だった大正期には、学校の通信簿（後に通知表と変わった）も十干の上の方（甲乙丙丁）を使っていた。「全甲」なら優等生であるが、なかなか全甲にはなれない。私は体操（体育）だけが乙で全甲にはなれなかった。本当は体操を丙にしたいところを、先生がおまけで乙にしてくださいだったのである。



蒼茫集



牡丹焚

菅谷たけし

音楽を聴いてゐるやう銀杏散る
人かげの暮色に沈む牡丹焚
牡丹焚百年櫓の燃えてゆく
牡丹焚赤松の幹照らしけり
牡丹焚空へ昇れる火の粉星
小さき火這ひゐる牡丹木の燠

黒真珠

北川英子

燃え尽きし走者や芝の枯やはらか
逝くに順なく霜の夜の黒真珠
白佗助葬儀戒名無用とや
白鳥のうなじ朝靄湧きのぼり
誰よりも遺影明るき冬座敷
ひしひしと一人となられ雪便り

牡丹焚

田所節子

雪吊の芯をつらぬく真青竹
あをあをと空暮れてをり牡丹焚
牡丹焚われも一会の輪の中に
牡丹供養櫓の齡を聞きにけり
牡丹焚いのち怒濤となりて燃ゆ
妙法を火の粉の描く牡丹焚

降水確率

安居正浩

かじる林檎アップルパイになる林檎
心にも降水確率クリスマス
偶数といふ安心の浮寝鳥
首隠すためのセーター誕生日
第二楽章始まるまでを咳きぬ
屋上に父とゐた日の冬の空

刻 印 辻 美奈子

メレンゲに角白鳥は着水す
白鳥を夜のみづうみに刻印す
着ぶくれて抱く火の色のグロリオサ
歳晩の木村拓哉に泣くことも
蛇穴を出づ鉄分の足らざる日
風船を待つてゐる子もふくらめり

磯 道 遠藤真砂明

ベイブリッジをまつすぐに冬が来る
舳綱投げし刹那の冬の雷
網を仕掛けて大灘の寒さ待つ
磯道に冬たんぽぽの日が一輪
糶終へし鰯に値札のなぐり書
人垣の真ん中で割く大鮫鱈

同心円 千田百里

殉教の島へ朱の橋身に沁みて
据糸置かるルルド色なき風を溜め

枇杷咲くや都心といふはこらまで
煉味噌が風呂吹の隙窺へり
ふぐ刺の同心円を崩す箸
日向ぼこにんげん臭の抜けるまで

枯木山 大畑善昭

しぐれ虹またしぐれ虹子生れむ
ご機嫌の山彦のゐる枯木山
青空を引つ張つてゐる雪吊ぞ
雪眩し鏡の奥の山並も
雪といふ魔物に整形外科医院

冬 菜 梅村すみを

冬菜煮て空気のやうに老夫婦
茶が咲いて余生の日々をうべなへり
なにもかも煙らす北浦しぐれかな
いぢめつ子いぢめられつ子鳩潜る
テロの世にかくも静けく池凍つる

潮鳴集



蛇穴に

甲州千草

七五三柱に曲る木真直ぐな木
蛇穴に筋金入のうねりもて
山知らぬきのこも入るる茸汁
月光を汲み尽すまで芋茎干す
水晶になるまで吹かれ冬の滝

一直線

宮内とし子

枯蓮の一直線の疲れかな
冬たんぽぽ眩し女の自立また
生きものに定温の土冬眠す
笹子鳴くすぐ細くなる島の径
ひとり餉に手間ひまかけて冬障子

遠火事

横山淑子

ITに馴染まぬ夜の紙懐炉
遠火事や何ゆゑ把手濡れてをる
筆先の勢ひ余りて枯葎
おしくらまんぢゅうあの頃の空広かりし
掛けられて革ジャンパーの肩落とす

小窓

服部早苗

フレンチトースト霜の朝日を卓布とし
幼子のミトンをつなぐ鎖編み
冬曙ガスの口火にある小窓
肩車して煤逃げの父となる
一日終ふ寒夕焼はロスタイム

沖作品



能村研三選

かごめかごめうしろに冬の来てゐたり

ハンカチのひやりと乾く冬田かな

小春日をゆく寅さんの旅靴

木枯の往生際といふ出口

齒科の椅子倒されてゆく芒かな

永遠の冬あり恐竜の展示室

凧やコンパスの円閉ぢそこね

寒き朝木に電飾の線見えて

駅員の冬日に佇ちてマストめく

東京の鬼門封じや枯蓮田

離宮絵図にのこる江戸湾石路の花

切株は秋思の高さ日に乾き

鉄塔のきらりきらりと獵期くる

綿虫や森の奥なる美術館

一翼の音なく翔てり冬の山

鶏のひよいと乗りたる鼯畏

テレビ塔完成予想図月冴ゆる

千葉

篠藤千佳子

東京

小嶋 洋子

茨城

内山 花葉

東京

齊藤 實

母と子の終ひ天神礼あつし

風呂吹にうぶすなの味噌添へてあり

寒風に尖端のあり突き刺さる

遠富士へ漕ぎ出してゆく湖小春

眠りゆく山へ湖波の綺羅つくす

裏木戸を訪うてかすかな霜の声

切り岸は蒼天に抜け青鷹

冬月光まとひ樺の棒立ちに

調絃の音又の余韻星冴ゆる

十二月八日元栓固締めす

ぐい呑は楽のずん胴関東煮

咳の目に陶人形の笑みしづか

朝寒の肩の波よす丸の内

老の手の竹刀風切る冬菫

短日や巻貝のごと犬眠り

点滅のトナカイ壁に十二月

愛知

近藤 敏子

千葉

井原 美鳥

東京

宮島 宏子

沖作品 15句選評

*
能村研三

かごめかごめうしろに冬の来てゐたり 篠藤千佳子

「かごめかごめ」とは、「かごめかごめかこのなかのとりはいついでやる夜明けの晩につるとかめがすべった後ろの正面だあれ」という子ども遊びの一つで、歌に歌われているので誰もが知っている。鬼が目を隠して中央に座り、その周りを他の子が輪になって歌を誦しながら回る。歌が終わった時に鬼は自分の真後ろ、つまり後ろの正面に誰がいるのかを当てる。千葉県野田地方の歌が全国へと伝わり現在に至ったとも言われている。この句も、この歌を踏まえての句で、「後ろの正面」に子どもなど誰も居なくて、「冬」そのものが来ていたというのである。俳句は、ストレートも良いが、この句のように何か屈折があつて読者を違う空間に導いてくれるのも楽しい。

永遠の冬あり恐竜の展示室 小嶋 洋子

何千万年もはるか昔、太古の世界に生きていた恐竜、しかし地球上から絶滅してしまった。それは、地球上氷河期がおとずれ恐竜が生活できる環境が崩れたからだ、言われている。

恐竜は上野の科学博物館にも展示されていると思うが、私も子どもの時の記憶しかない。恐竜は迫力をよく伝える、十分な高さをとったほぼ正方形の展示室の中に円形に配置され、上下双方からのライトによって、より立体感のある展示になっていたように思う。その展示室に立つたとき、作者は、恐竜の長い眼りを思い、寒々とした部屋の雰囲気を感じ取り、それを「永遠の冬」と表現したところが鋭い感覚。

離宮絵図にのこる江戸湾石路の花 内山 花葉

ここで言う離宮とは「江戸切り絵図」に描かれた浜離宮のことであろうか。昔は「浜御殿」とも呼ばれていて、絵図を見てゆくと、その近くには「御軍艦操練所」という海軍伝習所もあった。そして今の東京湾も昔は江戸湾と呼んでいた。今では埋め立てられたりしてすっかり姿は変わってしまったが、僅かに残す自然だけが昔を忍ばせてくれる。

鶏のひよいと乗りたる鼯鼠 齊藤 實

鼯は冬になると餌が少なくなるので、夜になると屋敷の鶏小屋の鶏や池の鯉などをすばやく襲う。毛皮の材料にもなることから毛をしかけて捕獲する。この句鼯と鶏の間柄なのだが、その鼯の畏に鶏がちよいと乗ってしまったのである。ちよとしたおかしみのある句で、鶏は身軽さがあるから、この畏にかかると心配もない。

眠りゆく山へ湖波の綺羅つくす 近藤 敏子

湖のなりたちは山と密接な関係にある。山が噴火したり、土砂が流れ出して川を堰きとめ湖が生まれた。山々に囲まれたしずかな空間にそつと息づく湖、秋の行楽シーズンも終り、人氣も無くなった湖畔は一層の静けさの中にある。静かに打ち寄せる湖波の綺羅とその波音が山々を冬の眠りにつかせている。